

繪本豐臣勲功記

初編

三

遠 13
2209
3



13
2209
卷 3

繪本豊臣勲功記初編卷之三

目録

老吉郎若所志寧父母

附切撰良主

織田信長初異風能敵國

附及秀練丸

豊臣記初編卷之三

目録

正法寺對面位長服道三

附一統尾別

藤吉郎春精場並所位長

附智吉解衆



繪本豊臣勲功記初編卷之三

江戸 櫻澤堂山 編輯

藤吉郎告取志寧父母心 属切撰良主

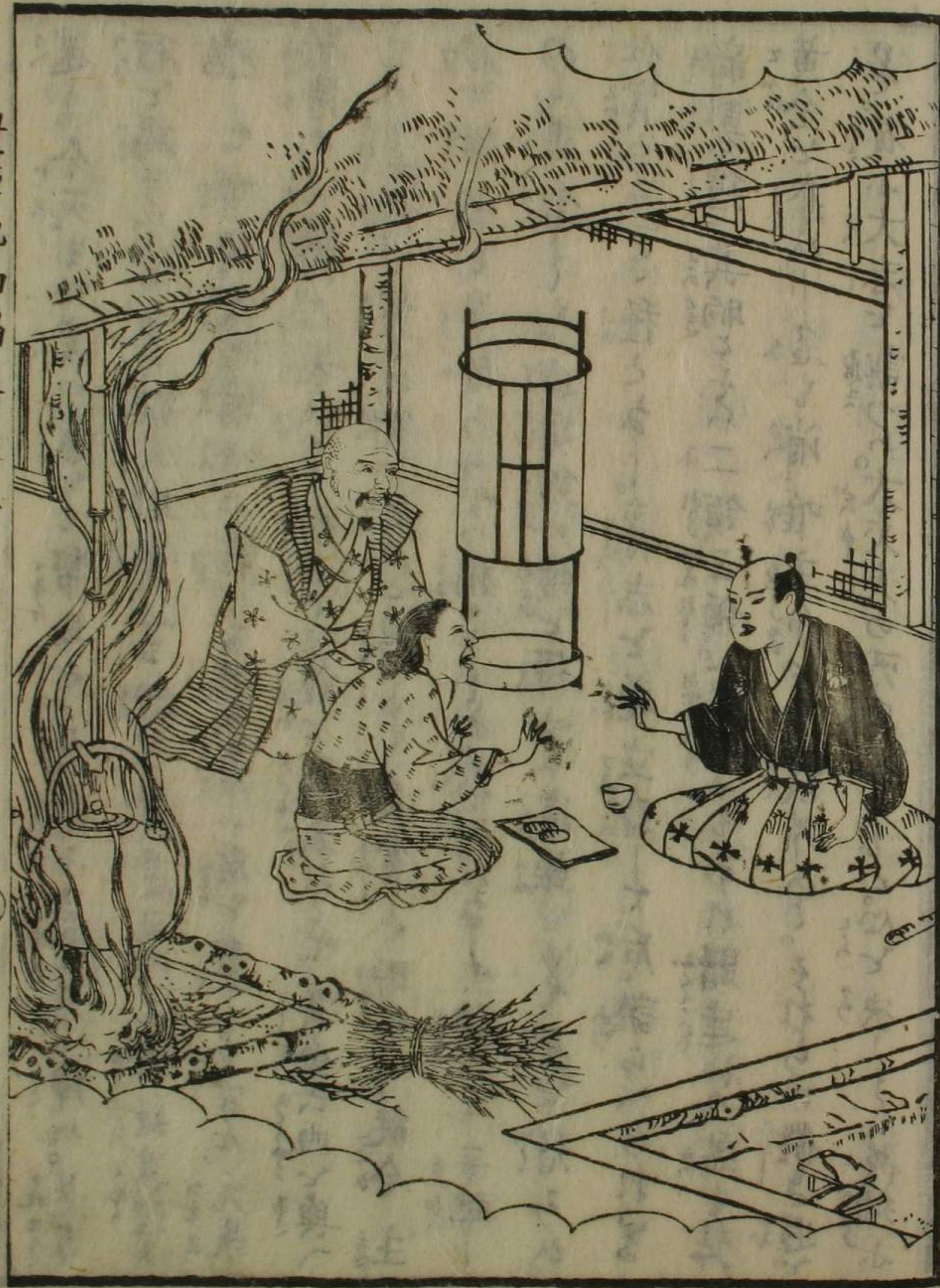
海を行ふ龍小駕山と行ふ虎小衆との南園子と安言とのとおひ
今木下が青雲行へ現小龍虎小駕せむんや三十餘年の戦場と
歴て四海と掌握せらるべけんや然バ木下藤吉郎高吉の大功細瑾と
顧ざるの語と覺く主人加兵衛が命とさるひ黄金六兩と持齎
つも尾州小還るその本意は快より高吉松下の家と辞まふ思へ
も幸持多て過せしが這遭こそ幸竟あれ故御小還り衣服と
袷良主と搦で仕官せむんと濱名と辞去急ぐ小程も廿五六里
二日路ゆく尾州の地小来ふけるが直小古郷中邑へ歸るもおもふを



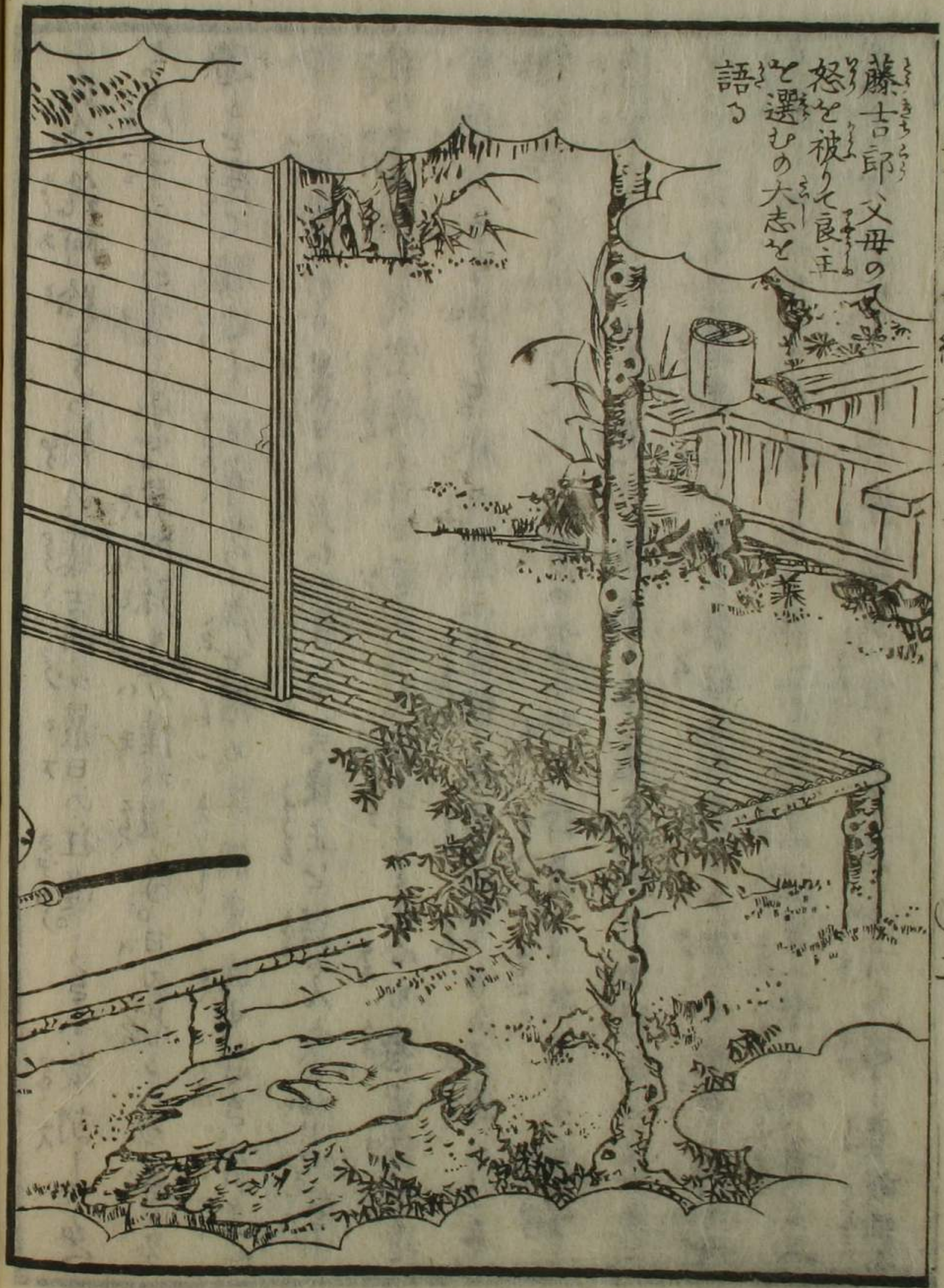
豊臣記初編卷之三

ありたれば。清洲ありける縁人の源左衛門が家小到て。先年の恩謝
 亦父母の安否とも。同き思を消息けるふ。源左衛門宅小在るれば
 喃叔父清少無事あておらむ。日吉丸ありけるふ。恙もあて喜悦す。
 と掩き値偶と通ふ舒ふふ。藤吉郎ハ草で。過越方と語るふ。源
 左衛門も且駭き。且嬉し。切も案小在られ。めと。急ぎ中樹
 誘行んと。家業の餘事と固き。藤吉郎と伴。竹阿弥が家小
 授す。母ハ素より。継父筑阿弥。弥助夫婦もうち歡び。賓客の
 如く奔走しけるふ。藤吉郎ハ懐より黄金一兩取出し。是と各面小
 貺つ。然し四五日経わらふ。辰の飯と喫む。其采出て遊歩
 申過らる家小帰らむ。叔のうちに弥助夫婦も。母小面小快く
 款待し。何日とあ。疎く思て詞も交さむ。有係小母も。靴や

し。筑阿弥より朝ハ。藤吉郎が累日の狂遊。よき小教訓し。之
 と。声曇らせり嘆く。筑阿弥も方僅ハ堪ふ。日の昏るころ藤吉郎
 還ると待て膝近く。昭穿せり声と偕め。子偶東國小奇き。筑阿弥
 経て還来つれど。累日小うらら。狂歩き。良主と撰ん。ちと。謂胤春より
 秋の央ふむれど。空徒小日と送るもの。奉公も。小心も懸む。然るに
 家業小も出さむ。徒我隨小徘徊。道小背ける不孝あ。ふ。や。
 親と親とも思をぬ。慈愛の怒小母も。綽著。子然す。小在遊
 齋来りつる黄金も。定めて購果し。つら。養郎の面目も。い。もの。
 刺し。言語道断。子か。事ハ。教経。や。齡も。面小。忙然と。父母
 兄弟小何日。辛勞さ。する。緯。や。と。半。怒。り。呵責。する。小
 藤吉郎。斯ハ。父母の。清教誠。恐惶。て。あ。が。了。開。も。過。春。故郷。小



藤吉郎父母の
怒を被りて良主
と選むの大志と
語る



還り。今天日て家の業をも帮助む。氣隨ふ公行せし縛は。是孝
 行と竭さんさあ。叔又貯齋る銀と。費遣さんとの滞疑。其理ふ
 應しと听しゆ。ゆて情雲不荏もせせ。奈不財と費しゆさん。元来
 所持の這銀は己来仕へし松下より。鎧と覓来れと。黄金六兩と與へ
 たり。小子預て松下の家と去んと思ふも。身食して貯る。縦令主
 君と揺らぶも。準備あらざる稱も。奈何なるて調んと。辛配し
 める機會も。這遭鎧の價と得ず。這銀とめて身と繕ふ。
 仕官あまぎ種と。青志と遂立身して后。誂らぐられざる
 新製鎧。其响と二領三領。百領もあれ贈達けん。然をね
 黄金と奪ひし。名も消。唯主命と遅緩せし。それらの微き過と
 して。徒小大志と誤つら。大丈夫の所為るら。心と決し。故郷小

還りぬ。斯る大事の黄金と。奈何でう徒小費しりさん。これ尙せ這ふ
 けつと黄金把かして見せければ。父母の敵て本意と知り。怖く許りふ
 感佩する。ふも筑阿弥おらび膝行。我と忘れて讚歎し。吁
 賢き心なる。原よりして不凡生と。預てより懐ひし。誠言も謂ごう
 か。果して大量斯の如し。子連目ふ出行つるが。良主と討護するやと。
 同つれて藤吉課おの。仕官の便宜ありれど。大低主君と憑む
 べき。心方い。合ふ筑阿弥巴しと笑し。我試ふ江湖の良將の義と
 論ま。まら京師も將軍家。權は。忍むる微弱み。武威ふ
 乏し。在りま。又藝州の元就は。威と四海ふ振る。他國の
 者と信し用ひ。今川義元玄田信玄偕ふ子か心小稱ら。然され
 ば。撰で主とも。當國清洲ふ在城す。織田殿あらざる。

書目録 新編 卷之三

三

べりき。上徳今信長公の。智勇無備に在る。人の賢愚と取捨
 して。手足の如く勞使す。我愚昧なる見え。剛ま戰國と鎮む
 器のまま此君あり。子今より功をとま。英名と天下に騰りとま。
 必ず介を厭ふ仕す。勸め高吉を頌ふ。呵あ父君の課せ。詞を我が存念
 とま。違ふ。快く這こ君を仕えとま。心を傾けとま。その動靜の実を
 とま。奉じ公をせんも輕く卒すとま。月次に日次に介を厭ふ。出で清洲の响に縣を從ひ
 その奉止と沈視し。最も頼むとま。大度の君あり。父の課も符を合は
 一し。心と決して介を厭ふ。仕官をとまとま。誥を听せ。毎日清洲に到り。
 上徳の出遊せ。响やあると待ちけるも。其の年の九月初日に介を厭ふ
 の道を違ふ。小牧山に出でられとま。响を來れとま。藤吉郎が雀躍しとま
 赴きける。其の一箇に談ひ。圖をとま。茲に尾州の清洲の城主に織田の上徳に信を

長公とののせし。桓武天皇十二代の後に亂る。平相國清盛の嫡孫
 三位中將資盛より。二十代十九代とま。歴し末孫あり。新家語織田
 資盛の子權大夫親實。この人江州津田の郷に住す。その子孫とま。其の末孫織田の大和守敏定
 敏定の子尾張の社の神主とま。後に越前の守護。其の家老とま。其の末孫織田の大和守敏定
 信秀の子信長。二十二人入り。信長の三男あり。因りとま。信長の父と備後守信秀とま。武勇あり。長し。智謀あり。富む。良將あり。其の勢を
 盛う。尾張八郡大半に歿す。從て領す。原來尾州の斯波家の
 領す。國を治め。織田の氏の某が居る家あり。原應仁に小を治す。斯波の
 一家二流に別れ。義廉の尾張の清洲に住す。義達。義統。義銀。倚り。
 清洲に在る城をとま。唯名のを心を任せ。織田の一族これ
 と守護。國政と執行す。動は他國より掠んとま。倅を累す。
 さをひひ織田の信秀智勇飽す。勝をとま。今に門を齋藤。

佐々木朝倉北畠浅井上杉毛利の門に八方より犯せんとども合戦
 毎度斬羸て威と隣國小震ひし。今尾州小馬と投犯さんといふ
 者更ふる。然るふ天文三年甲午の歳信秀の室家一男子と婉ふ。
 幼號と吉法師九と稱へり。其機大量ありて小事小拘らむ。大膽
 不敵あると云。千軍万馬の中と云。屑ともあはらば。幼稚ふあへり
 せむとのとも。夜とく日とく。武藝と嗜も。弓へ市門大助より
 守び。劍へ平田三信房と師とせ。又古渡の門ふあはせり。毎年春の未凡
 時より。九月ふ至る央まで。水遊と稱觸し。實ハ水練と試んとせ。水
 上ふ躍り水底ふ潜り。河泊水象も驚くをう。或ハ熱田の海
 上ふ船遊と船軍の操練も。逐龍攻撃ひとて。自得せむと
 し。これがふ父信秀。歡ぶるとか。あはく。三棘六異の珍寶

黒子曰和氏の璧夜光之珠二
 棘六異此諸假之珍寶者也

猶愛ぐる慈と年々速くも過來つ
 明と天文十五年丙午の歳より。吉法師九十三歳まで元服加冠
 の儀式あり織田三郎信長とあり。歳新ふりて天文十六年の
 春より。信長十四歳武者取とて三河國へ出馬ある。三郎
 傳の居下候へ諸公初陣の功名あり。俺們が功ありらんと故意
 大公の出馬と止め。信長と大將とあり。二千餘騎まで大瀆ある
 吉良の邊へ打発す。大瀆へ智多郡小瀬又西尾邊を。然るも敵も兵も
 見えぬ。這四面と放火し。悠然と野陣と構へ待らむ。敵軍
 出會さるるも。引退えんとせ。信長諸老臣と傳られ。今宵ハ這ふ
 滞留せしと回す。軍師平政秀信長の詞と訝り。這ハ敵地
 不知案内闇夜の野陣ハ殆危し。快馬歸陣こそあはくけねと

言まふ三郎頭面うち掉るるその諫是ふあらむ。徒火と放つもの
 りて攻とも連む退くへるも英雄の所志とせんや。臨機應変の
 進退あり今退るる却て危し。用心嚴まふ此處に待るる不時
 の功あらんと听て政秀ゆりて訝り退きまふ危しと云。河所存い
 と訊ると信長莞示とうち笑ひ予預てより其方ヶ教指の道を
 守るる故ふ斯の如く滞陣せり。今日敵地ふ襲投放火とありて
 威と頭せど敵兵一騎も発さるる自軍の退陣まづき路く伏兵
 りて歐破らんと謀りて緯必然たり予強ふ滞ると詮とまらむ
 あらざれども彼伏兵と打散とて道の用くと待のころ自軍這
 と退るる滞陣ありて居る响ハ敵の謀計齟齬て伏兵漸く
 怠屈生と退くあれは進むもあらず。信長と自軍も隊伍と

固めて歐発るる敵と敗らん俸易くまると。曰まふ詞ふ系多しといふ。
 諸勇士やうく感伏し。吁思慮莫大ある大將くる。數度戰場
 ふ臨る者さら。斯の心属さるる。四海ふ類もあき君ぞや凡人
 あらんと稱讚せり。本多の猶更喜起然ハ儲公の神慮も従ひ。
 隊伍と立んと諸士も指揮あり。二千の兵と五伍も賦ち。八百餘騎
 本陣と守らせ。二百餘騎の精兵と四五丁隔て堆伏させ。敵兵
 今も推来らば披單で歐んむと計設て窺待。响ふ信長自ら
 工夫し。雜兵輩ふ口屬つ。蒼竹數百砍取らせ。その丈一丈餘ふ
 りて先と銛く夫らせり。是と竹槍と名と呼せ。歩兵も會持
 せり。然し時稍子ふ入ころ今川方の軍士們昼のうちに會む。
 敵の勞れて退く路ふ伏兵ありて歐んむと。待ふ甲變るる日ハ暮

長門守 長門守 長門守



信長初陣大濱へ
撃出て明察剛膽
今川勢の夜殿を
頗る捉拉く

長門守 長門守 長門守



ころ。いふ待たも織田勢のまうも搦く機色多。陣と堅めて滞留
 せしむ。先夜歐とけよと。堆伏の兵一千餘騎。森耳ふ岡と响を
 て。尾張武者の肝損せん。うれくと襲来り。本陣めがけて投ら
 せ。然るも織田の軍中より。相尋と思しき一烽の半空よ响くや
 否や。織田が隊木八百餘人。鑓鉾をうらう。櫓突し。五伍の隊列
 とまらうも。茶さげ。曙先隊の歩兵們。竹槍の鉾きと。無右無左
 ふ鎧起し。赤地と進むやぞ。今川勢へ案ふ相違し。諸ハ
 敵あも小心あつ。夜歐と待しと思し。快退揚と声くふ。
 下知して退んとあされども。織田家の勇士勢猛く。櫓起し。搦
 ぐらふ。今川勢へ途と失ひ。先と争ひ路と求め。逃るるあふも
 名と惜と。耻と思ふ輩へ。踏止つ。血戦あり。斬殺する者多く

あらむ。斯て織田の軍兵も。若干討たぬべく見えし。四方ふ伏
 する五伍の精兵一時ふ起て今川勢と。中小歩くと推擡あり。血ふ
 しそねんむと。責着らねて前後も辨せぬ。逃るふ紛れて同士討
 まるり。名もなき。駛卒ふ撃るありて。遁る者最稀あり。這
 响信長諸士ふ指揮あり。先這隙ふ退くべきぞ。劇て一個も後
 るふと。自軍と纏めて静くと。野陣と拂てひき退き。尾州の地
 ふ至り一頃。夜へ果くと曉らけり。今川方へ夜軍と倣損し。最
 口惜く思ひつ。夜曉るやのあや。新勢とあり。昨夜の耻と雪ん
 と。岡と多りて推進せ見れぬ。織田勢已ふ隊伍と拂ひ。あふも町
 壱ふ掃除して。何處か陣の痕もやと。思ふをうりふあり。今
 川方の勇士隊。情ふ感して退きける。恠て三弟信長ハ十四歳の

初陣小。那許の奇計と做する。父信秀もさきりり。歓悦
 斜らむて。信長を真めて織田の家督なれと。思慮と決せ
 られける。所謂。備後守が妾腹小。長男あり。三郎五郎信廣
 後小大岡と号けり。嫡子なれども。妾腹なれば。信廣とめて庶兄
 と稱し。信長とめて嫡子とす。然るも。是節美濃國稲葉山の
 城主齋藤山城守利政入道道三といふ者あり。猛威と鄰國
 小振る故小。織田信秀とも幾遭う。挑闘小。梓あうり。近來
 齋藤道三ハ。美濃一國と領し。軍兵もすこ多うりける
 織田の兵士とらふる時ハ。こが一もなるといふも。織田勢
 殊小強きとりて。齋藤これ小辟易せり。然るも織田の軍長師
 平中務政秀が調略りて。道三が娘乙姫道三の娘と娶て。

室家小せんとも。道三も又預てより。織田の強氣と頼りく思ひ。ゆへ
 自方ふるさんり。速小これと諾受り。頃ハ天文十八年正月下瀬
 良辰と撰をれ。道三入道息女と送りて。那古野の城へ入興る。も
 或ハ天文十七年の冬とあり。私小按むる。平中務が堀田通定とま。方賀和の書の奥小
 袖ひちて結ひ。水の瀬をり。春まゝの風やうらけり。ゆへ推ときハ和睡ハ。立春のころ
 みて。婚姻ハ。信長と婚儀と調。漆膠の睦と結ひなれば。両家の士庶
 下民す。齊一。方歳と祝ける。

織田信長行異風 詭敵國 厲政秀 諫死

現小歡樂の窮する時ハ。哀情多し。漢武の辞も宜うる。備後
 守信秀公。同年二月の上瀬より。疾小犯され。臥し。醫療の術
 とんまも。驗はく。三月三日。早二歳と命期りて。修羅王
 廳小座と轉し。信長織田小家督して。清洲名古屋

等と領し。然して一字と建之。萬松寺と稱之。這小葬送の法
會と修行を。此年信長十六歳ふらせむらう。意趣や有けんを年
より專異風と好みて。其所行も尋常あらず。市中に往來する
駒へ。馬上あからし菓實あんなど。手の觸れし。摘喫し。怠る痒も
多入りける故。士家民屋の人々まで。噫痛やや大將の。狂氣
あつとあらんと。嘆くもいり笑もあり。忠臣老士もあらず。諫言す
れども容ひるをば。意の隨ふ奉止ける。這次父が卒をあらう。法
種小菘とむと。愁傷るる。氣色も見えぬ。梅香擱んで位牌小抱
着。左右も眇く退座せり。諸人のこれ小斬駭き。居家の心安からず。
家督の君の斯あつたら。國家全き緯いと。悲しむ者も多し。つら
平の政秀見ると忍びぬ。頻りに諫書と奉り。天子齋き父君の別

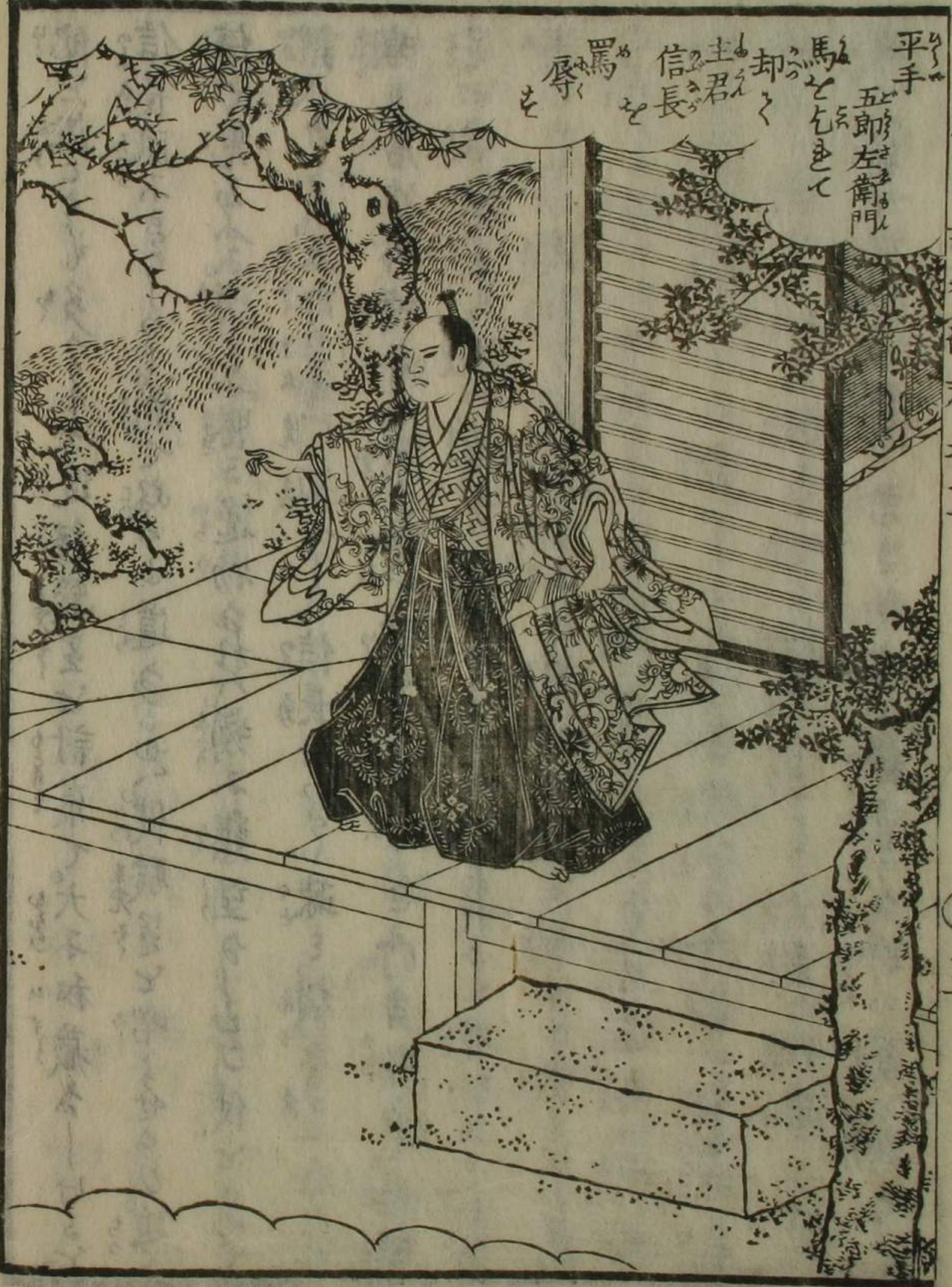
離と恥愁ひむらびと。萬小我意とあり。小公子とる道小持き。下万人
の歎と起す。清弱年とふらふら。家督の首をば。心
謹慎むらむら。當家の安危。覺束る。疾く所為と懸され
父君の所進善と最叮嚀。執行を然と。と諫けりと。信長所て
打照頭。然と亡父の追福と。諸人の心を安らう。んと。即時小務麻
へ命と傳へ。國の道端へ関所と。居住還の法子と。悉く捕來れと
嚴小拘。うらうら。人々の或ハ怪と。或ハ驚き僧と捕來り。あはいつるも
憂目小逢せむら。終と安き心も。うらざれ。命の如く。関所を。接
連目小往來の僧と捕し。信長これと所し。弘き。應小請。容
護士とつけく。日く。二時例の如く。小齋食と賄ひ。己三百餘人と集
る。信長殊小悦を。平日より。嚴小装束と。多くの僧侶小對面

せられ。四月下瀬ハ亡父信秀の四十九陰えん中ちゆうりぬれ。萬松寺まんそうじの法堂ほふどうを各讀經おんぎやう唱念しやうねん等らう。善道ぜんどう増進ぞうしんらりぬむと懇懃こんぎん伸のびられ。ふ。二百餘人にひやくじゆじんの大衆たいしゆ儼敵げんてきて安途あんずの色いろと顯あらわし。早速さつそく万松寺まんそうじふ走り。四月廿日しがつにじふにちハ早九日さうくじふにちの當日とうじつなれば。梵唄ぼんべい念佛ねんぶつ丹誠たんじやうとこり。法養美ほふやうび美みし。事終じじゆうて。百味ひやくみふ較くらず。齊食さいじきと饗施きやうじし。分ぶんふ過すかす。黄金こうごん若于じやくしよ布施ふせらて僧そうふ既あへ。禮厚らいこうく。惶いそと賜たまはる。是これふ衆僧しゆそうハ歡喜くわんぎし。信長の器量きりやうと感かんト各東西ごうせいふ分散ぶんさんしけり。城中じゆうぢゆう是これを見り。所ところも。悦讚えつぜんもある。中ちゆうふ政秀せいしゆい。心痛しんづうし。駒こまふ觸ふて教訓きやうくんしけれ。一時いつじハ用もちひあやふ見みられ。稍しやう日にちと過すかれ。素もとのやこれこれふ殆たいてい政秀せいしゆも計範けいはんし。在ありける。茲こゝふ平ひらな。嫡子てつしふ五郎左衛門ごらうざゑもんこりこる者ものあり。頗まる。劍馬けんばふ建たし。時ときく。能のふ誇こほす。慢まんし。

他たと誅しゆこも多おほく。這こゝ裡ち駿足せんそくと討獲うちとくて。大おほふ秘藏ひざうる。信長のぶなが夙むかしふさ。別わかてぬ。道みちある。彼かの駿足せんそくと昭あしめ。近ちかく侍さむらいて見みる。所ところも。勝かちる。逸物いつぶつなれば。頻まる。懇望こんぼうし。使つかひ。謂い入いける。五郎左衛門ごらうざゑもん預あり。信長のぶながとい。疎そも。頑魯生こんろせいあり。嘲あざわらり居いけれ。使者しやふ對たいひ笑わらて謂いす。必かならず。清身せいじん做しす。足あしと求もとむるとも。何なんの備よう。連つらぬ。鳥とり騷さわあれ。項羽きやうむも。赤兔せきと馬ばあれ。関羽くわんむも。名馬なばも。騎う主しゆふ侍さむらいる。易やすき。望のぞむ。且かつ這こゝ馬ばハ我われ武ぶ備びあれ。呈献せいけんし。會あはる。使者しや信長のぶながの清せい茶ちやふ出いす。五郎左衛門ごらうざゑもん稟りやうせ。如ごとく。詰つま。所ところも。信長のぶながハ素もとより火急かきゅうの性せい質しつなれば。夜よと翌あつち日にちて憤怒ふんぬと突つき。惡わるき。狗卒くそくハ雜言ざつげんする。聆りやうの藝ぎと誇こほらて。

書之已切編卷之三

三



平手
五郎左衛門
馬と七色て
却る
主君
信長
罵る
辱る

主と侮ること安うらね先や渠ふ腹切せ。諸人の身憊ふるを
 敦圀く怒りよふと。近士の輩四傍ふ把着いろくと宥め。五郎丸
 湯門へ憎く思まへけれど。父政秀ふ免せられ。只管赦しをせられし。
 と詞と喝しと諫けね。漸く怒と收めよへ。これより五郎丸湯門を
 憎とむひ。君臣不状の中とあるれ。政秀これと傳听。我子と痛く
 叱誡め。這等の弊と知る慈あて。一向主君の行状と革めんを。諫
 むら誠忠然ども信長馬の事より。不貞の体と見へさせよ。我
 るから心あらざ。智謀不富る。政秀も諫あぐんで方僅いた。諫書
 と残し切腹し。誠忠と願ましと。所念と決し。嫡子五郎丸湯門
 と膝下招き。汝一匹の馬と惜と。君の清心と損と。汝ハ勿論
 乃父まで憎とむひ。諫言と粟粒も用ひよつ。昔日故殿

の命と奉。大小事ふらぐらば教訓ゆ。奉ねば君の行跡善も悪
 も。愈乃父の教導ふ憑りと。黄泉ふ在ま亡君の思。もせん弊の
 心苦く。如何もあて清心と。革させんと。寢る間も忘れず。諫
 言の工夫もより外他事。然るも這程の蹶躓と。假令富
 婁那の辯と振とも。その易更ふらう。是貪汝が無禮と起。此
 此罪と謝し。もせん。汝速ふ切腹せ。我亦諫めて聞さねば。死
 その道ふらう。自害せん。父子潔く死とあさ。亡君よもや俺
 と猶憎し。思ま。我君も亦ま。革心す。因こも
 ろり。ん。徒浮くと日と経らう。万が一も當家の来地と。境窺ふ
 敵のつらふ。一里一村奪とる。死と真途へ至とも。故殿へ何と
 解語せんや。方僅こそ平政秀父子。自殺あまき時。これと父か

勸りふ五郎九郎門忍入る。平伏し。父の教ふ従ふ。無禮の解語
 つらまらんと。謂もをらるる。渾肌脱。腹十文字。小搔斬て。付伏ふ。死
 てけり。義肝ある哉。政秀ハ。我子の自殺と。傍ふ見らる。心静小筆
 執揚。諫書と長く。と書終り。叔次男。監物秀時と。昭出。軍
 學の秘書陣法の密意。六韜。三畧の奥義。す。残る。隈多く。傳
 授。次小諫書と。楚と。仔細遺言あり。畢り。腹搔切
 て死し。うける。嗚呼。義ある。忠ある。周公の成王。於
 管仲の桓公。於る。子胥の夫差。於る。大次下あり。この。其忠
 心。至て。政秀も。さ。あ。開も。君と。諫め。これと。容られ
 ざる。胸ハ。或ハ。退き。或ハ。遁也。主と。誘む。族も。あ。平。中務丞
 政秀ハ。諫言と。喝して。君臣の禮義と。乱ま。更。我子の無禮と。責

て。父子一。身。切腹せむ。は。死。其君と。強く。諫りて。善。導く
 へ。無双の忠臣と。謂。然。平。監物ハ。父兄の血。散。左。右。ふ
 見て。目も。瞑。心も。乱。悲。歎。沈て。ありける。時。刻。移。亡。士
 の。忠義も。水の泡沫。と。涙。拭。禮服。父の遺書と。携。信
 長の。衣。襖。候。父。始。未。と。構。伸。遺書と。把。拏。げ。わ。わ。
 信長。大。敬。馬。さ。ひ。忙。封。推。鑽。用。て。觀。覽。一。小。數。箇。條
 の。諫言。小。誠。と。顯。義。と。喝。且。五。郎。九。郎。門。無。禮。と。許。救。あ。ら。ふ
 厚恩の。是。小。過。と。筆。信。や。う。記。信。長。の。讀。も
 畢。ら。む。潜。く。と。落。涙。噴。政。秀。が。思。詔。自。及。せ。り。惜。ひ。く。悔。ま
 へ。今。誰。と。軍。議。と。要。時。諫。書。と。顔。あ。て。声。と。放
 ち。嘆。息。も。傍。見。ら。る。痛。ま。く。監。物。も。不。覺。の。泪。堰。敢。む。父。兄。の

自害詞も。竭きの哀とえぬれども。方僅亦主君と孫をねば。誰
 たり斯まを惜とえん。然まれば自害も徒あらざと。心雄く思
 あり。威儀と整て言状けり。亡父と然まを思さん。せめて
 諫書の十が一とも。清純用賜らば亡魂も功ぞ悦まん。只管願ひ奉
 ると。言あざれば信長公より。柔和の氣色を。我政秀が諫言と
 須ひざる。あはれざるも。信る戦國の中なれば。容易本意を他ふ
 譚らむ。然ども渠程の政秀なれば。平心底い識つらんと。故意听さ
 体ふを。今天まで我意不過つるが。斯る癖不置ぬらん。実ふ心
 と知らる。予信許ふ異凡と好む。傍若無人ふ奉止こと。只管予
 と虚託と見せけ。敵國の機と奪えん。謀計ありと。政秀へ実
 の頑魯生と懐く。就中僧と捕へ。法事の布施ふ

若干の黄金と貳一俸。軍用と費を不慮ありて。実ふと。哀戚と空
 情あらと。諫つれども。予本意と相違せり。予初年予と慈父子離
 是。殊ふ四方に強敵あり。怖るべき時節ありと。諸去巖と思ふらん。が
 予へ強敵怖る。くらば。父ふ棄られ。俸との。賜と断思せり。然と
 別り哀戚と。武備不怠る。奉出来て。他ふ其虚と。窺われんと。悲
 哀と。面ふ顯さむ。將又親しき鄰國たりとも。心緩して。油断へら。と。
 と謀累せし。誑頑魯。そく。衆僧ふ若干の黄金の觀施せし。俸
 軍用の費と思はざる。あはれされとも。まふ三百人餘の僧侶。倚り雲
 水散遊の輩なれば。尾州の穢田之所こそ。法會と修して。那許の布
 施とひきりと。蒲州へ。走行。風聽ふ。忽ふ。予名の四方へ。聞ゆ。一
 雄士大功と。えん。先名と。諸邦へ。响せざれば。事と為て。容易

らば然ばとて名と此方より徇て廻る。得も得が。這次追善の
事こそ竟幸因て斯へ計らひしを。名と揚兵と強く。國郡を
切廣げもせむ。亡父の為の追福へこれお起めよもあら。政秀此
思深らむ。智者も千慮の一失多。然へし予と深く思ふ
自殺せしこそ不便なれ。今より行跡と革むるは。心易く追薦せし
と愁嘆數刺不賢む。監物深く感服。少年の君み。斯を
遠き神慮ある。今古無双の名將る。然れど不在まこくも
し。舌の柔なるも。嘲謗りも。律。返も。怒り。平伏
あり。深膜。信長落て日。汝這詞と世の人。必も。余他
ま。唯政秀の諫死不同。行跡と革む。披露せし忠臣
の所志も失る。却て其名と揚る理あり。曰ま。監物

秀時ま。君の慈惠と甘。獨安途の思ひと。斯て其後信
長も希有の奉止休。城中の諸士。政秀が諫死との。讚嘆せり。
信長近來在。氣の模様。休ぬれ。異風と好む。律へ更ふ。これ
と止む。然るも美濃の稲葉山。城主齋藤入道。道三の
織田小縁と結び。うも信秀程。病死せ。道三悔て。脚
と。信秀が早世と。懐て知ら。縁と結を。速小尾川と。斬取。き
もの。縁者と。あつる。朽憾。徒。信長の。蹠。所。不。虚。記。し
とい。余。他。あり。愈。風。説。小。遠。つ。む。一。家。の。縁。と。断。截。て。速。小。軍。馬。と。突
し。尾。川。と。藁。地。小。乘。取。べ。先。づ。れ。も。信。長。小。對。面。し。て。后。計。ら。ん
と。使。者。と。尾。川。小。遣。し。て。道。三。の。口。状。と。伸。け。る。事。近。年。織。田。家。と
縁。を。結。び。乙。姫。入。壘。あり。后。の。尾。濃。兩。國。一。家。の。如。く。親。と。深。い。ふ

信長ハ舅道三の契約小周程多ク當日小多クねねバ富田小走き對
 面せんと準備已小具全時。采田權六平多監物。詞と喝して諫る
 也。原齋藤家ハ敵國小して數年戰ひ挑と一々。比方の威小怖れ
 て縁者と成つる也。所心と緩さるる也。且父君逝去こいひ所若
 年の所身と多ク。敵國の老将と集會の思召とち宜一かくト加之
 道三ハ偽多き性質なれば。心中を多ク量ぐ。這遣ハ所勞と謂連
 て。所新詞一むりきこと。言まを信長鞭くと笑ひ。道三は國へ来るぞ
 らら。國中の虛実と窺ひえん小彼國へ招き行くと望とみれ。縱令
 入道害心あるとも。那量の律と。做突さん指さる心勞小暨くべうと
 年彼國小到りる。道三と誼とて。齋藤の老臣。倚か肝と冷させ。若存
 とも。采田一向足させ。都て大將する也。初度の參會こそ大切也。

信長ハ舅道三の契約小周程多ク當日小多クねねバ富田小走き對
 面せんと準備已小具全時。采田權六平多監物。詞と喝して諫る
 也。原齋藤家ハ敵國小して數年戰ひ挑と一々。比方の威小怖れ
 て縁者と成つる也。所心と緩さるる也。且父君逝去こいひ所若
 年の所身と多ク。敵國の老将と集會の思召とち宜一かくト加之
 道三ハ偽多き性質なれば。心中を多ク量ぐ。這遣ハ所勞と謂連
 て。所新詞一むりきこと。言まを信長鞭くと笑ひ。道三は國へ来るぞ
 らら。國中の虛実と窺ひえん小彼國へ招き行くと望とみれ。縱令
 入道害心あるとも。那量の律と。做突さん指さる心勞小暨くべうと
 年彼國小到りる。道三と誼とて。齋藤の老臣。倚か肝と冷させ。若存
 とも。采田一向足させ。都て大將する也。初度の參會こそ大切也。

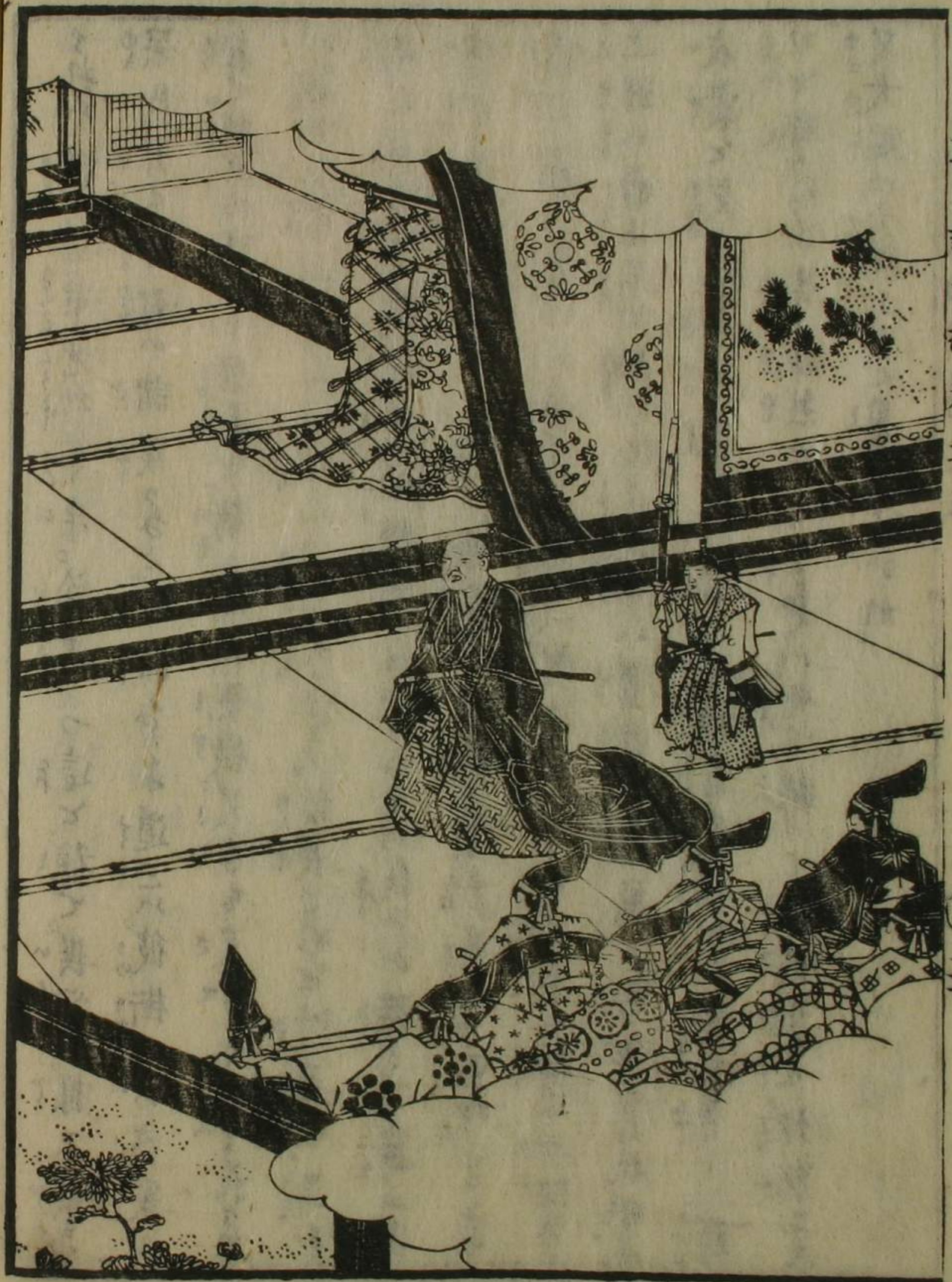
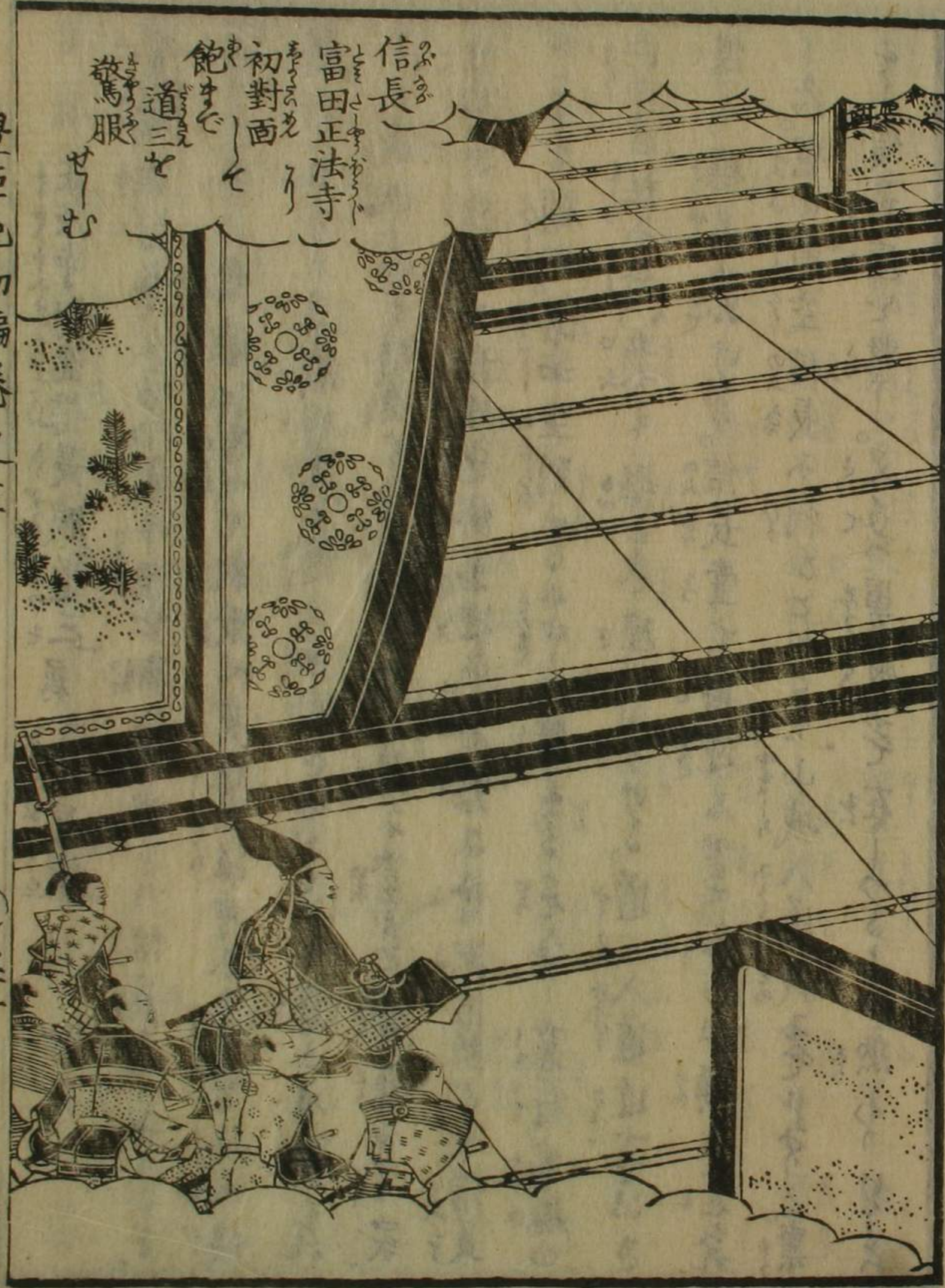
豊臣の刀編



豊臣の刀編

看よ看よ渠か機と奪ひ。伏せん痒意中ふあり。牛ふ三筋と革丸
とと。上總公と自稱す。次小行列と調へんと。三間柄の鎗と作らせり。
是の丈八の子より。這遭富田。赴きよみ。その行列の打拾ひ。近代の法則ふ
工丈せしめ。先一番小新鑄の鳥銃五百挺。次小三間朱柄の
新調鎗。五百條と連ねり。次小帮手の士卒百人。食赤具夜ふて
馬茶小列を。次小大将上總公。其日の打拾と詳ふい。浅緑の絲
めて髪と茶釜のさる小巻。遊形漆の帷衣ふ。熨斗つきの太刀纏
刀と。鞆長く藁巻中へ。這と帯し。芋繩の腕貫と着られり。其外
腰ふ燧袋。古瓢をも。種々の器と捆着。虎豹の皮ゆて四桐と繡せる
半袴ふ。肥て猛りき。驪馬小跨り。七百餘人と牽俱し。岐岨川と
西へ流り。一步半足の乱行あり。富田の庄ふ参向せり。己街に小到り

多れん。彼所の輩老幼尊卑。途重りつ這と観て。異心同様小駭き
呆也。开も赤好の諸侯多と。私語あり。道三は彼街末の商家小
在て紙戸の隙より。信長と。情く地小視徹。又ふも又ふもと言されれ
ハ近士も借ふあり。やと。叫一叫笑あり。信長これと所着つ。馬を
騙て商家と観視。噴煙尅見うらむらむ。紙戸の隙より。窺ふ不
禮。予装束と看んと思つ。眼茶ふより。観よと。声高らふ。呼よむを
道三これ小驚く。背路と蹠技。精舎ふ入て快来と。待小時際を
上總公。赫小馬と駭せ。正法寺小登来り。憩廳小脱鞍せられ。頓小
衣装と更り。茶釜髪も折鬘も。裾布の禮袍小袴と着し。履
刀と鞆。ち小帯。嚴然と。出まへ。打て。翻りて威儀。夙東。殊勝も
又大岡の大将と。これ見えり。けれ。



正法寺對面信長服道三屬一統尾張

鷲鷲雜稚ふりとくども千里と翱る風羽あり。信長もくふト六才。信長大家の齋藤と省とも執敢て方僅正法寺不參會一。威儀騰くと出たりくバ織田家不隨一人家さら。よくこそ信長準備あれ。感佩してぞ伺候せり。信長法堂の縁不登りく齋藤の居家堀田道空春日丹後守休出迎ひ懇懃不會釈あれども。信長まこも願む。諸士坐列する中と臆まる色あぐ穿行客廳の向中の柱不倚。五かも髻中座一うける。道三入道近士とひき俱一。廳上ふ出ける。信長聳て觀迎もせむ。知らぬ顔して在れ一ふ。堀田道空信長不朝ひこれとそ山城入道殿ふくゆると稟す不信長座と敷一。又ふへ男殿あて在つるよる然ありける。

更ふ存せむ。鷲不街口の商家あて。紙子超ふ某と。窺居より一楹極児ふくも侶ふの顔貌あむ。挨拶せり一失禮済免。某と信長かれと。行義整一辞状一これ。道三心不怖恐。最先障紙と僅不阿。面と潜めて窺ひ一我と早くも觀認一眼力方僅生と信長辞義せん。吁思ろ一さ少士くると。感むる色の露と。堀田道空取教む。鉋子土器持出。初對面の式あとうる。道三もこれと氣と屬られて。懇懃不挨拶あり。信長より徒士ふるまふ。山海の珍味好炙とそ一。最叮嚀不款待これ。君臣借ふ喜悦と舒當日の未と過る頃。辞宴と傳へ覆盃せられ。道三不別辞と告信長清洲へ牽返す。道三入道半途まで。これと送りて別れ。齋藤の諸士侮笑て諷や。幾遭見ても織田殿へ。頑魯生と

けらるるやと。所て道之大息吹然るをみる吾兒輩仰へ。遠くらぬ
 目下頼魯生の門下馬と繋ぐと思へり。朽骸や。然るに信長
 齊力へると。洞と流して稍要時。言とも謂てありけるが。再び頼小
 波と添。實ふ信長が器量雄材。洒家の賢ふところあつて。遂もの
 輝ふ濃州一國。聘贈ふまゝんぞと。顔色もさく。若られり。叔も清
 洲の人々の。今日信長の奉止と見も。一所も一ける。己未做さる
 頼魯の行跡。深き所思。愈のあつる。緯よ。信は明君ふく。四方
 の敵國強くとも。何忍くともあらん。と歎合て安途一ける。又信長
 事も已後ハ。全く異行と疑られ。武備專ふ行つ。威と隣國に
 震ひける。茲ふ弘治二年の春。齋藤道三の嫡子。治部大輔義
 龍。遂意と起して父と打んと軍と出せ。これくさふ道三ハ尾州へ

加勢と乞われける。故信長忽地ハ二千餘騎と援兵一けるが。這兵
 美濃へ着さる。うち道三入道。鷺山ふて。戦死の由と。所織田勢
 これふ力さく。其後尾州へ率退れ。斯と所より信長ハ。舅の仇と
 義龍と征滅さんと思へ。國中の事と。穩あらむ。織田の門動を
 ね。謀殺とありて清洲を討る。これか。あふ他國へ向づき。暇なく。
 残念ながら。願所謂といふ。尋るふ。信長の舎弟。末森の
 城主。武藏守。信行の傳士。林美作守。とりありあり。奸佞邪曲
 の暴生され。上總介と歐す。信行と主君と。我も采華を
 極めんと。采田權六。あらび。兄と。林佐渡守と。荷擔ら。信長
 と歐んと企けるが。天罰。遂に遁れ。美作守ハ。稲生。おひく。
 信長の。あふ誅せらる。舎弟。信行。面同。あふ。剥髮。うて。勸解。お

初はつの如ごとく末森すえのきの城しろとふあく居城きやうじやうさせ。林佐渡守はやしざとは末田權すえのたか
 六むとも罪つとと赦ゆるして。本領ほんりやう安途やすぢまさきせしむ。これをして微まく静謐せいぎなり。
 其世語そのよごく休やすむらふ。同どう一いつ度兄たか大隅守おほぐも信廣のぶひろ野心やんと起おこして
 騷動さうどうも然しかども其事そのこと遂すむとて。降参かうさんの義ぎと乞こなれり。同どう平へいの
 冬ふゆふゆり。信行のぶゆき荐すすび謀殺ぼうころと企たくつ。原来げんらい這こ武藏守ぶさうのいん酒さけの長なが
 一ひと倭人やまとと愛あいまゝるが故ゆゑふ。奸曲けんきよくこれふ隨まてあむく。無道むどうと勸すすめし
 うふ忽たち迷ます野や心こころせり。血脉ちくま同胞どうぱうの舍弟しやていあれども。再またこの謀殺ぼうころと
 りひ。平日へいじつ行状ぎやうじやう善よらねば。信長のぶなが今いまの赦ゆるしがら。欺呼あやまで誅ちゆうせしむと。
 評議ひやうぎと決けつして使者しやしやと達たつ末森すえのきの城しろ。謂遣いひつかや。這遭このたふ信長のぶなが危あや
 病やまの侵おされ命いのち且暮いづふせり。家督けあくと信行のぶゆき不讓ふじやうと。快たく
 出駕しゅつがしまくと。听きて信行のぶゆき大おほ歡よろこび。性質せいかう愚昧ぐまいの悲かなし。何心なにか

へく清洲きよすふ来きと。池田勝三郎いけだかつざう信輝のぶあき承うけりて武藏守ぶさうと誅ちゆうし。幼稚ちゆうし
 の男子おとこありしと。林佐渡守はやしざとこれと助すけて養やしやふ。後のち信長のぶながとあり。斯しかのごとく
 一族同胞いっしやくどうぱうの間あひだに。諍乱じやうらんあつて國中くわうちゆう霎時しやくじも鎮ちんまらざる。濃州のうしゆう
 発向はつかうと延忍えんにんを。志しむむ木國きこくと固かくせむと。道みちと正ただし。藝げいと練ねり。專せん
 民たみふ仁にと施しす。大度たいどと行ゆふ。尾州おしゆう七しちをあら。平均へんぐんせり。然しかふ
 年とし号ごう華かて。永禄元年えいりくげんとあり。國中くわうちゆう大おほ静謐せいぎしけねば。信長のぶなが
 一ひとも民たみの苦疾くしやくと勞らうとんと。鷹將たかの律りつと催もよほす。采地さいち巡見じゆんけんと
 課命かめいさ。頃ころハ永禄元年えいりくげん九月朔日くわがつしやくにち。上總じやうすう今いま信長のぶなが公こう小牧山こまきやま將しやう
 せん。柴田權六しばたけんろく勝家かつや佐久間さくま右衛門尉ゑもんゑい信盛のぶもりと敵たかりて。池田勝いけだかつ
 三さん即すなは信のぶ懸けん坂井さかい右近ゐづみ盛種もりむね。後のち其その勢せい一ひと千せん有あり。餘人あま。辰たつの正ただ
 刺さふ清洲きよすと発はつし。小牧山こまきやまの將場しやうばうふ赴おもむき。銘めいく修練しゆれんの技わざと顯あらわす。

弓鳥銃竹槍をんと。ふふふ専門の兵器を携へ。東西南北に馳
 御て。鹿猿鬼狐狸の類も及ぶる。碧霄の鷹を放ちて。羽
 類と槍り。多くの獲物ありける。暫時休息ありて。藤野の
 廣野に陣と居。信長自ら諸士と勞ひ。兵糧をつうつ。憩ふ。
 癩の猪おき。這ふ木下藤吉郎高吉の。春より秋の末まで。心を
 碎て信長の動靜進退と試ふ。寛雄ありて大度あり。け君あり
 べん仕あぶき人外あり。あつと。心と必定向ける。其便宜を得
 んものと。日々清洲と徘徊ける。這遭信長小牧山小田原の
 ことありける。宜機會ありと彼所不到り。直訴あると伺ひ
 ける。方僅休息の間をよゆれと進出。信長の所へふよると
 すると。雑卒あをて推止れ。那奴あれば。憚りき。大將軍の所へ

通る。素去をわらふと。嘯つらると。藤吉郎へ僅ふよとさげ。只管願ひ
 の條あつて。直ふ大將の所へ参る。切の思ひき者ならむ。通る。之
 と大音ふ。呼ぶる声小駈卒とも。強く怒をせと竹もて。藤吉郎と左
 右より塞止。今日所遊獵の場も憚りき。案内もたのきを押通る。
 必定極極見ふ想遠ある。捕捕て呵責せんと。先ゆき。藪と大
 將信長遙ふこれと所見あり。何事あるを見て参ると。柴田と昭て
 命とる。權六拜膜走來り。駈率輩小所謂と同。藤吉郎が動
 作とありのまゝ。是は。柴田勝家藤吉郎小打向ひ。子ハ何國の
 者乎。如何ある願ひあれ。無体小所参。推参せんと。疑ふ
 ら。敵國の間者ならむ。刺客ならん。信条小招道せりと。眼と遠
 釣て。責る。みせ。藤吉郎の。も駈る。吾小。所采地。出生



織田信長
 小牧山小田掃く
 君臣不思議の
 値偶を
 結ぶ



あつる者なれば。刺客間者の族ふあらざ。大將軍の清承へ参り。直ふ
清頼ひりまを條有。新心配ふらば。河披露あつて然ふべしと。輝も
あけふ演じれば。柴田權六大ふ怒も。吓廉忍も。言條うる。能くく
も願ありとて。直ふ清承へおんとまると。軒ける奴ふ想違ふ。斬て
棄てく。只。清頼場の妨なれば。命の助る疾く去と。怒精暴
く言れど。藤吉郎は。一も臆せど。足下の課せと有がごとし。這采
還るをどあらば。得く這を参りんせど。願の條とて別儀ふらさど。
仕官の望とあるふより。これを参向ひ。在て清承へ伴なれ。上。
大将我と清覽あつて。倘使とくと課せあらば。其响こそ退去せん。
唯大将の清一言と。聞まがりくまると。听より權六堪へらぬ。おのれ下前
のふらと。信長公へ直訴せんと。身の量知らぬ不敵生。言ふ謂せを

捕擒と指揮し。さうぶ歌卒們折重て木下と。高直賦ふむ。
綱めとて。

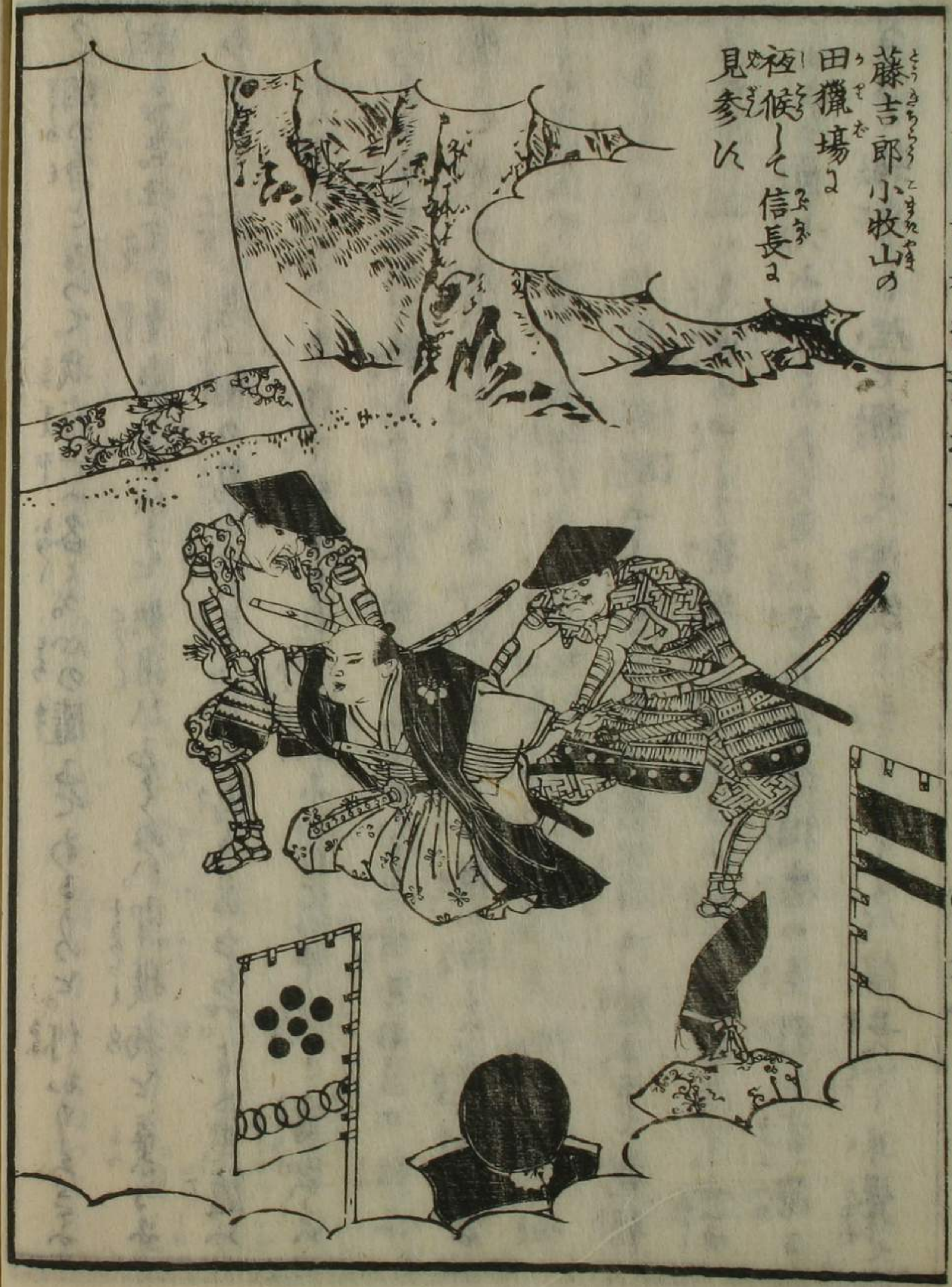
藤吉郎参狩場直訴信長附智舌解衆

張良よく履と把り。韓信在て袴と實れど。遂ふ漢と起し。這ふ
藤吉郎高吉。一連篠田の奴とありて。芒履と捆。或ハ權六が脚と
摩も痒。張良韓信ふ髻帯。加え今此小縛索の辱とらとて
之とも龍の泥海ふ塾よるふ異なるらむ。頓ふ清承へ撃看る。信長
原来大雄みと。思慮深き大将なれば。木下と近く抱かさせ。熟くと
河覽ある。權六傍より声太らせ。汝が願満足と。大将の清承へ参向
せり。詠稟す痒。ゆら。速ふ言状せん。倘すふとも罪らば。即時小誅
と加ふ。と。発町と睨へ藤吉郎。名を笑して唇舐て。今日清承の

獲物ふ。禽獸多くけりけれ。國と取廣げらるる。便ふいよも
 相成す。小子不屑の軀も。よき獲物の狩多し。言状せんと存
 ぜ。故。這身を推参りて。間者刺客の類とちがれ。誅せ
 られんと課さる。怪むて小意得が。斯細と蒙がらる。怖
 小足らぬ小子あり。け上も猶疑ひあ。清心浅く听え。放つとも
 殺すとも。唯清意小信一む。放ちるつるを。却て。却て。これを
 棄るふ齊く。殺す名珠と碎く小全。下和が珠も名工をけ。瓦
 礫不給ふ。時至らるれば足と斬る。小子更ふ悔まらぬ。謂ふ權
 六愈らや。利口小弁と振ふも。實一らぬ辞をあれ。今謂在
 する其言下ふ。能獲物と進めんらる。卑賤下郎のちりて。國主
 と恐ねぬ不敵の廣言。誰者めとりふと打消。斯へけらぬあをる。

く細の身とあつて。我存亡に各いふ心の隨をあるめと。何わらるさふ
 誰るべき。仕官の事ありといひし。執用ひむらぬ。即獲物と棄るふ
 わらむや。一跳の兎一劍の鶉とりふ。目も属るあらる。よも見道に
 做るふす。況や卑賤下郎ふまれ。士一個ふあひて。人と禽獸と
 づれと取づれと捨ん。下郎卑賤とりふといふも。禽それの任ふ
 應じて。役ふ連べ。大將軍の清心と。下郎卑賤の心と。豈格別の
 このあらんや。斯波殿。土岐殿。武備殿。何と一國と治
 めむらぬ。人の相狼の好醜ふらる。大將軍の清眼力。觀撰
 らせふ。丸礫の中より夜光の玉の。出るふ存き。緯あるべ。小子
 らら尊大ふ誇るふ。只君臣時機相應の差別と言。演
 らる。詞正しく理と諱して。演説一。信長。耳聳て

藤吉郎小牧山の
田獵場
夜候と信長
見参次



听しり。まづ權六ふ命あつて。木トク繩と解せり。偕勝家と傍ふ
 座せり。藤吉郎と近く召され。汝予が國と富め。兵と強うらむ
 術あらむ。即時に扶持し得まむべき。胸中らるる籌策ありや。
 試み譚れよ。命せよ高吉三尺を膝をて進め。譬ふも良禽へ樹
 と樞び。名長は主と樞む。別の望もゆらむ。只小子が主君と頼
 むらんと存せしや名。斯に推參つらうねと。稟きよ佐久間右衛門尉
 君と樞んむ仕えんや。定で君の器量まき。所と知て然まの辭
 とゆらまらんが。汝も丈量の藝徒らん。有べ試み言まべ。吾を
 一能まの藝とて一藝を。只膽の大なること斗の像し。天地の間
 小なる物。藝徒なきものらん。况や人の身と受て。其職に應
 せざるべけんや。奈何なる才子智者うらむ。用ゆる君のなきことらん

其功德と顯せむ。然に賢愚に主君の清心小園べと。憚る色あり
 言へ。柴田存び盤同子指する。藝徒あり。只大言と吐のこみ。
 倘召抱へむひるべ。いさる役と望まやま。然に家宰仕俊健児ま。
 會それの忠義あり。貴賤高卑の品はうれど。忠義は同ト忠義
 あり。忠義も上下の差別はあら。小子奉公つらまらふ。何の役と
 望むべき。君の命せよ信まらむと。詞明白言へければ。信長のいふ
 未曾有ありと。稱嘆あつて望みの如く。扶持し得ません。可面龜へ
 猿小像せり。小猿よく勤りと戯れむ。衆人も小猿よくと。猿号せり
 然やよ信長よ。殊の外に悦びむ。今日の將の獲物こそ。木ト小
 挿小猿され。得し歸城まらむと。勢子と收り陣と拂ひ。清洲と
 當しを遷られける。

清張延玉牙謂木下人は也。明史傳曰。信長偶出獵。遇一人。即樹下驚起。衝突。執而結之。自言為平秀吉。雄健

躡捷有口辨信長悅之
今救馬名曰木下入

豐臣實業傳卷之三

繪本豐臣勲功記初編卷之三終

